

海を背に、未来を願う

【登場人物】

篠原七海（34） 定食屋「なぎさ凧里」の店員

甲本一喜（35） 防波堤工事の作業員

篠原雅子（62） 七海の母

漁師

地元の人々

【梗概】

震災で津波を経験した篠原七海（34）は海沿いの定食屋「凧里」で働いていた。客は漁師しか来ないその店に、ある日、甲本一喜（35）が通い始める。甲本は、この町の防波堤工事のため、徳島の美波町から臨時で作業をしにやって来ていた。防波堤反対の音が強い中、甲本なりの信念を持って建設に取り組んでいる事を知る七海。「次世代の人達を犠牲にしない、それが僕の想いです」と甲本。同じ海の町に生まれた二人が、共に未来を想う。

穏やかな波の音と、海鳥の鳴き声。

篠原七海（34） N 「あの日、この穏やかな

海は、怪物のような唸り声をあげていた。

初めて見る海の表情が怖くて、私はひたすら前だけを見て高台へ走った。高台に着いた後も、怖くて町を見る事が出来なかった。隣にいた見知らぬおばあちゃんが、やめてくれ！ 町がなくなる！ と叫んでいた。私は何も出来ず、ただただ震えていた」

アルコールを吹き、タオルで机を拭く。

そこへ、扉の開閉音。

漁師 1 「おはよう、七海ちゃん」

七海 「あら、お二人とも早いですね」

漁師 1 「俺、豚汁の朝食セット」

漁師 2 「じゃ俺は焼き魚にしようかな」

七海 「はい。お席でお待ちくださいね」

具材を切ったり、汁を鍋で温める音。

七海 N 「この海沿いの定食屋・凧里（なぎさ）は、出港前の漁師さん達が来る事もあって、毎朝 4 時から営業している。調理場には父と母が立ち、私が接客をする。∴∴震災後、多くの人々が住居を高台に移転した中、私たち家族は、海の傍での再建を選んだ」

扉の開閉音。

甲本一喜（35） 「おはようございまーす！」

七海 「（笑って）甲本さん、朝から元気ねえ。今日も珈琲とパンでいいですか？」

甲本 「お願いします！ 洋食派なもので、いつも無理言ってますんません」

七海 「いえいえ。先に珈琲、お持ちしますね」

珈琲を、カップに注ぐ音。

七海 N 「最近店に来るようになった甲本さん。
漁師さんしかいない店内で、一人だけ工事
現場の作業服で、言葉にはどこか訛りがあ
り、少し浮いていた。彼の会話を聞いてい
るうちに、防波堤工事のため、臨時でこの
町に来ている事が分かった」

レジの、会計音。

七海 「はい、ちょうどですね」

甲本 「今日もほどほどに頑張りますかあ」

七海 「お仕事、頑張ってくださいね」

甲本 「七海さんにそう言われたら、真剣にや
らんとやねえ……」

七海 「（笑う）」

客がいなくなり、静まる店内。

水で手を洗う音。七海の溜息。

篠原雅子（62） 「お疲れさま。午後の営業

まであがっていいわよ」

七海「母さんは？」

雅子「食材足りないから買い出し」

七海「それなら私が——」

雅子「いいのよ、これも気晴らしなんだから。

ちよっと行ってくるわね」

扉の開閉音。

七海N「母さんは昔、店の看板娘だった。震

災後は部屋に籠り塞ぎ込んでいたが、最近

ようやく調理場ならと仕事復帰した。……

あの時、もし両親を失っていたら。正直、

店を続けていたかは私も分からない」

波の音と、船の出港する音。

雨の音。

扉の開閉音。

七海「いらつしやいま……甲本さん？ 昼間に来るなんて珍しい。今日はお休み？」

甲本「雨で工事は中止ですわ。それにしても、この時間、お客さん全然いないですね」

七海「昼に来てくれていた人達は、みんな高台へ移ってしまつて。珈琲でいいですか？」

甲本「いや、今日は定食にしようかな！」

七海「パンしか食べない人だと思つてた」

甲本「あはは」

調理をする音。

甲本「今日は七海さんの手料理か」

七海「両親は休憩してる時間なもので。……」

あの、甲本さんって、ご出身は？」

甲本「徳島の美波町って所です。ここと同じ、太平洋に面した気持ちのいい町ですよ」

七海「そうだったんですか」

甲本「少し手が空いてね。同じ海の町っていう縁もあつて、ここの作業を手伝ってます」

扉の開閉音。

主婦達がお喋りしながら入ってくる。

川手（43）「七海ちゃん！ 久しぶり！」

七海「あら、お二人ともお久しぶりです！」

人見（49）「近くまで車で降りてきたから

顔出そうと思って。この辺は懐かしいねえ」

川手「とりあえず、珈琲２つもらうわ」

七海「はい！ 甲本さん、定食少し待ってね」

甲本「いえいえ、僕にお構いなく」

川手「ここに来る時、防波堤見たんだけどさ、

本当酷いもんだよ。あんなの作ったって意

味ないのにねえ。景観が台無しじゃない」

人見「あれを目にするたびに、なんだかうち

らの町じゃないみたいでね、悲しくなるわ」

川手「七海ちゃんも前『水平線から昇る日の

出を、この店から見るのが好きだ』って言

ってたわよね。防波堤が完成したら、七海

ちゃんも嫌なんじゃない？」

七海「……それは」

人見「この町は海と共に歩んで来たの。あんな物を建てたら、海と陸が断絶されるわよ」

間。

川手「ごちそうさま、また来るわねー」

人見「お母さんによろしくね」

七海「お二人とも、体には気をつけて」

扉の開閉音。

甲本「僕もお会計しようかな」

七海「……さつきはごめんなさい。二人とも

悪気があって言ったわけじゃないので」

甲本「いいえ、あの二人の言う通りですよ」

七海「え？」

甲本「防波堤を建てたとしても、100%津波を防げるわけじゃない。漁業や観光にも影響する可能性もある。何より、住民の人達が

愛した町の姿を、壊す事は事実ですから」

七海「甲本さん……」

甲本「僕、行きますね。おつりは大丈夫です」

扉を開けかけて――。

七海「あの、甲本さん！」

甲本「はい？」

七海「防波堤が完成したら……店から日の出が見えなくなったら、この店畳もうって両親と決めたんです。それまでは、頑張ってみようって。海の傍で」

甲本「……七海さん」

七海「私たち家族には、区切りが必要だったんです。次の道へ進むための」

甲本「そうだったんですか」

七海「……関係ない話をしてすみません」

甲本「七海さん、僕は思うんです。景観も、

町の活性化も、生き延びた人達に立ち直ってもらおう事もとても大事です。でも、防災

の最大の目的は、人を死なせない事です」

七海「人を、死なせない」

甲本「防波堤が正しいかどうか、正直まだ分かりません。答え合わせは災害が起きた時。そんな日が来ない方がいいに決まっています」

七海「そうですね……」

甲本「今優先すべき事は、次世代の人達を犠牲にしないことです。僕たちが行った事が、次の震災で多くの命を助けるかもしれない。そのために出来る事ならなんでもやりたい、それが僕の想いです」

七海「……それでこの町に」

甲本「たくさん試せばいいと思うんです。試行錯誤して、事前復興について真剣に議論すればいいんです。正解はない。命を守るために何をすべきか、皆で考えればいい」

雨の音が小さくなっていく。

大きく波打つ音。

工事現場の作業音。

七海 N 「次の日、私は甲本さんの作業現場に行ってみる事にした。甲本さんは私に気付くと嬉しそうに手を振った。親方のような人にペコペコ頭を下げたかと思うと、少しだけ抜け出して来てくれた」

水筒からコーヒーをいれる音。

海鳥の鳴き声と、作業員たちの談笑する声が混じり合う。

甲本 「まさか出張コーヒーが飲めるなんて、今日はラッキーだな」

七海 「雨の翌日は、随分と波が高いですね」

甲本 「あの、七海さん」

七海 「はい？」

甲本 「……美波町にある僕の家からも、日の出が凄く綺麗に見えるんです。いつか七海さんと一緒に見たいです。気が向いたら、

遊びに来てくれませんか」

七海「ええ、いつか見てみたいですね」

甲本「……あのー」

七海「はい？」

甲本「今の一応、告白なんです」

七海「え？ うそ？」

甲本「……なんだ、海見ていい雰囲気やと思

ったのに、失敗やなー！」

七海「（笑って）ストレートに言ってもらわ

ないと分かりませんよ」

甲本「今度、やり直しさせてください！」

七海「ええ、店でお待ちします」

波の音。

男女の笑い声が、海の風に消えていく。

（完）

【参考文献】

- ・美波町 町政公式サイト
<https://www.town.minami.lg.jp/>
- ・マイナビニュース「被災地に続々建設中の
巨大防潮堤 地元住民の反対意見も多い」
<https://news.mynavi.jp/article/20140129-a529/>
- ・アベマニュース「東日本大震災から6年
巨大防潮堤を【選んだ町】と【拒んだ町】、
それぞれの今」
<https://times.abema.tv/news-article/2109847>